

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1年計画の1年目)

## 1. 研究課題

東アジア馬文化の研究

A Study of Horse Culture in East Asia

## 2. 研究代表者氏名

諫早 直人

ISAHAYA Naoto

## 3. 研究期間

2020年4月-2021年3月(1年目)

## 4. 研究目的

東アジアの諸地域は、中国でさえも家畜馬や馬車の利用において先進地域ではなく、西方からの直・間接的な影響を受けて二次的に始まったことが明らかとなつて久しい。またおおむね前1千年紀後半から後1千年紀前半にかけて、馬車から騎馬へと戦争における利用形態が大きく変化するとともに、家畜馬や騎馬の風習がそれまで認められなかった地域に急速に拡散していく。日本列島における馬の出現は、この変化の最終局面として捉えられる。このように個別の地域・時代に対する研究成果を紡ぎ合わせることによってある程度の概観は可能ではあるが、東アジアにおける家畜馬や馬車・騎馬利用の出現や普及、その後の展開のプロセスについて、資料の実態に即しつつも一貫した視野のもとに論じた体系的な研究はまだほとんどみられない。本研究は、こうした問題点に鑑み、中国・朝鮮半島・日本列島の馬車・騎馬文化と馬匹生産について、ユーラシア草原地帯と比較しつつ、関連する考古資料と文献史料の検討をもとに明らかにしようとするものである。

It has been shown that eastern Eurasia was not especially advanced in the use of domestic horses and chariots, and that even China was a secondary region compared to the direct and indirect influences derived from the West. From the latter half of the 1st millennium B.C. to the first half of the 1st millennium A.D., the way horses were used in war changed drastically as horse-riding replaced chariots and the customs associated with domestic horses and horseback riding rapidly spread to new areas. The appearance of horses on the Japanese Islands can be seen as the final phase of this change. In this way, it is possible to present a rough overview of horse culture in East Asia by collating research results for different regions

and time periods. However, there are relatively few comprehensive studies focusing on the emergence, popularization and subsequent development of domestic horses, chariots and horse-riding in Eastern Eurasia, based on actual archaeological data. In view of these problems, this study compared horse culture and horse production in China, the Korean Peninsula and the Japanese Islands with that in the Eurasian Steppes, using archaeological materials and historical documents.

## 5. 本年度の研究実施状況

本研究班では、2020 年度に3回の研究会を実施した。7月の第1回研究会では、ユーラシア草原地帯における馬利用の開始とその東方拡散について、研究報告と議論をおこなった。馬骨・歯の変形・摩耗状況やDNA分析、車や馬具の出土状況などから、前4千年紀から前3千年紀にかけて、ユーラシア各地で馬の家畜化と利用が進められていく状況が示された。12月の第2回研究会では、中国魏晋南北朝時代の馬文化をテーマとして、2本の研究報告をおこなった。まず、これまでに整理してきた中国の魏晋南北朝墓出土の陶馬や馬車・牛車明器のデータをもとに、文献史料と対比しながら、馬車と牛車の関係、鞍馬の役割、馬具の変化などを議論した。続いて、おもに5世紀の墓室壁画・漆棺画などの図像史料、および墓出土の動物骨をもとに、中国北朝の騎馬遊牧文化について検討を進めた。2月の第3回研究会では、日本古代の馬文化に着目し、おもに文献史料にもとづき古代の馬政について議論した。

## 6. 本年度の研究実施内容

2020-07-03 ユーラシア草原地帯の馬文化 馬利用の開始と東方拡散 発表者 中村大介 埼玉大学

2020-12-18 中国魏晋南北朝の馬文化 魏晋南北朝の「馬俑」について 発表者 大平理紗  
京都府立大学 考古・図像資料からみた北朝の騎馬・遊牧文化 発表者 向井佑介 京都大学  
人文科学研究所

2020-02-19 古代日本の馬文化 日本古代の馬政の特質 発表者 佐藤健太郎 関西大学博物館

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

## 8. 研究班員

所内

向井佑介、岡村秀典、古松崇志、藤井律之

学内

吉井秀夫（文学研究科）、坂川幸祐（文学研究科）

学外

森下章司（大手前大学）、井上直樹（京都府立大学）、中村大介（埼玉大学）、青柳泰介（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、佐藤健太郎（関西大学博物館）、片山健太郎（奈良文化財研究所）、菊地大樹（総合研究大学院大学）、Joseph Ryan（岡山大学）、大平理紗（京都府立大学）、大谷育恵（金沢大学）

9. 共同利用・共同研究の参加状況

	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	2	6		1	1	1	15		3	3	3
国立大学	3	3		1	1		7		4	2	
		(1)					(2)		(2)		
公立大学	2	3		2	1	1	6		3	2	2
		(1)		(1)	(1)	(1)	(3)		(2)	(2)	(2)
私立大学	3	3					4				
		(1)					(1)				
大学共同利用機関法人	1	1					3				
独立行政法人等公的研究機関	2	2					3				
民間機関											
外国機関	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)
その他											
計	14	19	1	5	4	3	39	1	11	8	6
		(4)	(1)	(2)	(2)	(2)	(7)	(1)	(5)	(3)	(3)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	0			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	2			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
埼玉大学紀要 (教養学部)	1	R2. 9	先スキタイの馬具成立に 関する諸問題	<u>中村大介</u>
柳本照男さん 古稀記念論集	1	R2. 12	日韓における馬冑・馬甲 研究の現状と課題	<u>諫早直人</u>

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

なし

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

昨年度の若手A班「東北アジアの騎馬文化と馬匹生産の研究」および今年度の若手A班「東アジア馬文化の研究」において蓄積した知識と経験をふまえ、その研究領域をさらに拡大・発展させるかたちで、2021年度から共同研究A班「東方ユーラシア馬文化の研究」を新たに発足し、3年計画で研究を進めていく予定である。そのなかで、今年度までに実施してきた若手A班の研究成果については、まず2021年度に一般向けの公開シンポジウムとして成果を公表し、その後、さらに一般向けの書籍などのかたちで公刊していく計画である。